



## 第7章

### 新市の発足に寄せて ～合併協議会委員による寄稿～

協議会会長 鹿北町 西牟田 長

国破れて山河在り、城春にして草木深し……。

山々の木々が柔らかに芽吹くこの季節になると、杜甫の「春望」が思い起こされます。

気がつけば、岳間村、岩野村、広見村の3村が合併し、鹿北村が誕生して早50年の時が流れ、今また更なる平成の大合併、正に、光陰矢の如し、歳月は人を待たずの感これありの心境です。

わが郷土「鹿北町」。笑顔あふれる住民が往来を行き交い、子供たちの歓声が谷間に響き、灯火こぼれる窓辺からは、夕餉を共にする一家団欒の楽しげな声が溢れ、希望に満ちた朝を迎える。

私は、平成5年に鹿北町長に就任以来、温かな、地域に体温のある鹿北町の住民の皆様と手に手を握り、このような夢を抱いて町政に取り組んでまいりました。

夢半ばにして、平成の大合併を迎えたことは至極残念ではありましたが、大きな時代のうねりの中で住民の幸せを考えると、町政を預かるものの一人として、平成14年、任意の協議会が設立され、1市4町が合併に向け大きな一歩を踏み出したことは、誠に意義深いものでした。

それぞれの歴史と文化を持つ市や町が、お互いの立場や住民感情を慮り、平成15年1月1日設立の合併協議会の中で議を尽くしてまいりましたが、数々の難問を、関係者の良識ある判断の中で見事に解決し、平成17年1月15日、1市4町による対等合併がなされたことは、歴史に残る偉業と、皆様と共に自負するところであります。

この間、潮谷義子県知事、県議会議員の古閑三博先生、早川英明先生、池田秀男先生、熊本県鹿本地域振興局の角田岩男前局長、金子達郎現局長をはじめ、数多くの皆様に、深いご理解と温かなご支援を賜り、心から感謝を申し上げます。

また、熊本県、各市町から出向の合併事務局職員の皆様には、特にご苦勞をお掛けいたしました。精力的に事務を遂行して頂きありがとうございました。

心からお礼を申し上げます。

紆余曲折を経てひとつの峠を越えはしましたが、ここ山鹿市に住む人々の日々の暮らしは永久に続き、越えても越えても山また山が続くやも知れません。

全てが未経験の中、これから先、平成の大合併の成果が問われることとなるでしょうが、次代を担う若人に夢を託したいと存じます。

合併に携わった者の一人として、市民の皆様に「合併してよかった」と思い、感じていただけるような「新山鹿市」建設のため、命ある限り、もてる力の全てを注がせていただく所存です。

6万市民の皆様のご健勝と、新市「山鹿市」の未来永劫に亘るご発展を祈念申し上げます。

## 合併を終えて

協議会副会長 山鹿市 河村 修

県北で初めて、既存の市を含む1市4町が合併し、新「山鹿市」が去る1月15日に誕生しました。

県の試案では、A案が鹿本郡市の1市5町、B案がこれに玉名郡三加和町を加えての1市6町でしたが、協議会以前に植木町の不参加表明があり、鹿本郡市1市4町での協議会になりました。途中で三加和町からの参加要請がありましたが、まずは1市4町を先にとの4町の意見を優先しました。

人口・規模に関わらず、対等合併でいくこととなり、協議会会長に隈部菊鹿町長を互選し、事務局も菊鹿町に置くこととなりました。途中、会長辞任により西牟田鹿北町長と交代となりましたが、両会長共、懸命に励んでいただきました。又、菊鹿町には、立派な施設を使用させていただきました。

事務局も、堀事務局長、県から出向の木村事務局次長を始め、各市町から優秀な人材を派遣され、この事務局を軸にして、各分科会・部会・幹事会・協議会と積み重ねて協議が進みました。

県内の多くの協議会の中で、途中折り合いがつかず振り出しに戻るところもありましたが、出発も決して早い時期ではなく、難題もあった中で、合併が遅い方ではなかったことは、今までの同郷意識と、互譲の精神が発揮されたためと思います。

新市になって、5名いた首長や議長は一人になり、又本庁と総合支所になり、行政が身近な存在でなくなるのでは、との懸念があるかもしれません。しかし、戦後60年かけてきた民主主義と地方自治の精神が根付いており、住民の身近な課題は身近なところで解決するという、地方分権時代にふさわしい住民自治の大きな花が咲くものと思います。

平成の大合併に参画できた一員として、感謝と感激を覚えると共に、新市の限らない発展を見守っていきたいと思います。

## 合併の歩みを顧みて

協議会副会長 菊鹿町 栗原 辰也

平成17年1月15日、新春を迎えて早々に、山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町の1市4町の合併により、新生「山鹿市」が歴史にその名を刻み始めました。

顧みれば、昭和30年に鹿本郡内田村、六郷村、菊池郡城北村が郡を越えて合併し「菊鹿村」が誕生。以来山紫水明の地において歴史と文化を大切に、「自然が輝き、人が輝き、まちが輝く活力ある地域づくり」を念頭に、今日まで50年の歩みを経ての再度の合併であります。

ここに、昭和の大合併以降幾多の困難を克服して現在のすばらしい町を築き上げられた先輩諸氏の方々に、心から敬意と感謝を表わす次第であります。

さて、今回の合併協議を顧みれば、平成14年3月1日に1市5町による山鹿鹿本合併問題検討会を設立後4回の協議の結果、植木町の脱退によりその枠組みは不成立に終わりました。

取り組みは白紙に戻りましたが、その後各市町それぞれ住民説明を開催し、合併の是非や具

体的な枠組み等について住民意向の把握に努めるという申し合わせを行い、それを実践したことが、その後の合併任意協議会の設立につながったものと思います。

菊鹿町議会においても合併問題検討委員会を設置して4回の協議を重ねた結果「菊鹿町議会は合併任意協議会に参加するべき」という結論に達し、町長にその旨の申達をした次第です。その後任意協議会から法定協議会までの2年半に渡る協議や、町内各種団体の代表による合併問題町民懇談会約20回、町議会合併特別委員会36回等が開催されております。

法定協議会においても、各種協定項目について慎重審議を重ね、菊鹿町の総意として意見や要望を述べるとともに、互譲の精神をもって結論へ導くよう努めたつもりであります。

この間、町民各位の深いご理解とそれぞれの任に当たられた方々のご尽力のおかげにより、多くの難題を乗り越えてこられたものと存じます。

山鹿市となりましても、「菊鹿町」の町名は残ります。豊かな自然環境の中で延々と培い育んでこられた歴史と文化、「わが町は美しく心豊かに」の伝統と精神を大事にしながら、ふるさとに愛着と誇りをもって、新生「山鹿市」の創生に寄与できる市民でありたいと願うものであります。

合併してよかったと言える、また、県北の雄として、磐石の発展を祈念いたします。

協議会副会長 鹿央町 杉焼 義文

2005年、初春の1月15日、県北に新しい郷土「山鹿市」が誕生しました。この日を迎えますまで歴史を重ねた旧1市4町住民皆様の御理解と志しを共にし、険しき課題を越えて参りましたが、「互譲と信頼」の熱き思いが、確かな道筋を示す力となり、実を結ぶことが出来ました。

顧みること3年有余、「平成の大合併」という壮大な政治課題の実現を期し、“市町村合併って、何あ〜んだ？”と言う資料を頼りに開催を重ねた夜毎の住民説明会も、今は懐かしく思い出されます。

可能な限りの情報提供に努めた結果の効か？ 住民の方々の認識高い御理解と判断をいただき、迷うことなく進めることが出来ました。

地方自治背景の厳しき時代に備える戦略であることの合意のもとに、責任ある立場でご尽力を承った首長様、英断いただいた市町議会議員の皆様、真摯に取り組まれた法定協委員の皆様、各市町協議委員さん方と、数多い関係者の皆さんの英知と心労で成し得た偉業であります。

あらためて、事務方を含め、共に汗された皆様方のご心労に対し、心から感謝申し上げます。

新市が目指すシナリオに“人はぐくむ”“暮らしみのも”“産業ひらく”と示しております。未来に向かう基盤が整った今、6万住民の期待に応えるべく具現化への取り組みが望まれると思います。

新市全域に有する豊富な人材、自然と資源、文化的財産と住民の英知を武器とした「活力」に満ちた“山鹿市づくり”を期待するものであります。その歩みの基盤は“強調と協働”にあると考えますし、新市づくりの力強いパートナーは6万住民であります。

ここ「山鹿」に潜在する総合力を駆使した郷土建設への営みこそが、“まほろば創生”への道と信じております。熱き心で「山鹿市」の限り無き発展を祈念します。……感謝。

## 「合併のあゆみ」に寄せて

山鹿市 寺崎 勇

見

本年1月15日の新山鹿市「開庁式」において、来賓各位の祝辞を聞きながら、これまで3年近くを要した新市誕生までの道程を、改めて思い返しました。特に、市議会における白熱した議論、住民説明会等での様々なご意見、そして2年間に及ぶ法定協議会での度重なる検討など、新市発足を迎えるまでの色々な出来事が、まるで昨日のようにも思い出されました。さらに、式典の締めくくりとして、庁舎玄関でテープカットに臨んだ際には、新市のスタートを迎える感激とその責任感が入り混じり、何かしら熱い思いが込み上げて参りました。

これまでの合併協議の過程においては、解決の方向が見えない困難な局面も幾度かありましたが、そのたびに「合併の目的は何か？」という基本原則を自分自身に問いかけながら、同時に多くの皆さんの努力を頼みとして、今日までやっとたどり着いたという感じがいたしております。

このように、多くの皆様の大変な努力によって新市が発足したことは、大変嬉しいことですが、冷静に見れば、新市建設の入り口に立ったということであり、すべては、これからの努力次第であることも、また事実であります。新市の将来展望は、旧市町の住民と行政が互いに心を一つにして、汗を流しながら切り開いていくしかないことは明らかです。今後、6万市民の情熱とたゆまぬ努力によって「新市建設計画」に掲げるまちづくりを進め、県北の雄都として、九州のみならず、日本や世界に認められるような山鹿市へと発展することを願う次第です。

最後に、これまで長い間、合併問題に携わって来られました多くの皆様方の努力に心から感謝するとともに、私自身も新市の今後を見守りながら、自らの責任を全うして参りたいと考えております。

山鹿市 田中 宏

新市のスタートにあたり、次のようなことを考えます。まず、合併により生まれた新しい職場の人間関係が資質向上の好機となります。自分を変える人は、ある日思い切り過去の習性を変える。他の市町で仕事していた人から刺激を受けることで、職場の中に活力が生まれ全員に資質向上が期待できます。このことは新市の知的財産が増えることとなります。次に、組織の確かな広がり努めることで縁が強い絆となっていきます。

「網の目が、互いにつながりあって網を作っているように、すべてのものはつながりあってできている。一つの網の目が、それだけで網の目であると考えれば大きな誤りである。網の目は、他の網の目とかかわりあって一つの網の目といわれる。網の目は、それぞれ他の網が成り立つために役立っている」(勝鬘経)

1市4町は、縁あって一つの市になりました。その間いろいろの事項について調整のため意見を戦わせながら、互譲の精神によって平成の合併を成し遂げたわけです。この「互譲の精神」による合併に思いを馳せながら、これからは「互助の精神」で、その具現化に精一杯努めていかねばなりません。そのためには、これまで育んでくれた「おらが市、おらが町」という思いを大切にしながらも、固執することなく、お互いに痛みを分かち合うことも必要です。光あふ



## 合併協議会委員を振り返って

鹿北町 藤本 仁一

「何処から来られましたか」「山鹿のほうからです」これは、以前私が県外の旅先で尋ねられたときの返事の仕方です。別に山鹿市に憧れていたわけではなく、まさか将来このようなことになるとは思ってもよらず、また鹿北町と言ってもわからないだろうし、ただ説明するのに面倒な気持ちがあったからのことです。

今回、突如として降って湧いたような平成の大合併。突然住民主導で持ちあがった話でもなく、国の都合で仕方なくが地域住民の率直な感想でした。私が生まれる5年前からあった鹿北町。当然愛着もあり、共に歩み、色んな面で育ててもらった恩もあります。鹿北町の名残より、独自色の行政がなくなる事への一抹の寂しさ、不安がほとんどの方の心情だったように思います。

振り返れば当初、2年間の合併協議会委員を受けるに当り、高尚な志を持ったつもりもなく、また下手な地域根性を振りかざすつもりも有りませんでした。歴史的な場面に立ち会うことの喜びを感じて最初は協議会に臨みました。しかし、協議を重ねるにつれ、また執行部の新市建設計画をはじめ熱意ある議案に触れ、あるいは他県の先進地研修に参加し、これは仕方なくの合併にしてはいけないと私自身熱いものがこみ上げて来るのを感じました。途中、議論の白熱もありましたが、終盤は「互譲の精神」でまとめられました。その互譲の影には、国の言いなりだけではなく、より良い新市づくりのために、委員各々が真剣に戦い合ったという、最後は仲間意識が芽生えたからに他なりません。

私自身、途中、合併協議会の方々や、町委員の方に、はらはらさせる発言もあったと思いますが、最後まであたたかくご指導いただきありがとうございました。

そして今なら堂々と言えます。「どちらから来られましたか」「はい山鹿市です」と。

鹿北町 野中美和子

私の生まれ育った鹿本郡鹿北町は、いまその幕を閉じました。50年間の長い歴史を刻んだ鹿北町は、山鹿市、菊鹿町、鹿本町、鹿央町と広域合併し、人口約6万人、県内4番目の人口を有する新生「山鹿市」へと生まれ変わりました。

合併協議委員として協議に参画し、多くの方々との出会い、ふれあいの中で、いろいろな面で大変勉強させて頂きました。

新生「山鹿市」の市庁舎の位置小委員会に属し、数度に及ぶ協議の中で、意見を交わし、時には激論の場があった事などが思い出されます。

地域が抱える様々な問題点や課題はたくさんあります。合併はゴールではなく、歴史の中の通過点であり、スタートラインだといわれるように、合併を機に、住民一人ひとりが、10年後、20年後と子供や孫の世代を見据え住みよい地域づくりに、お互いの知恵を結集し、「合併してよかった」と思えるまちづくりが出来ることを望みます。

## 市町村合併の回顧

鹿北町 黒田 耕一

昭和29年の三村合併、岳間地区は合併で役場が遠くなる。当時、車は無くバスで役場に行く不便さ、地域が寂れるのと時代の流れに乗り遅れる不安を抱きながら合併に踏み切った。

岳間農協は豊富な農林産物と相互扶助の気心が硬く結束し、県下でも優秀な農協だった。昭和20年代には役場と農協の人事交流があり、村長と参事が交代し、村をあげて強調する伝統的な精神が受け継がれていた。今回の合併にも同じ意味合いの意見が多く出ました。過疎高齢化は加速する。市役所から20キロも離れる思いは複雑でした。でも住民の方々が厳しい時代を認識した岳間の良識に深く感謝申し上げたい。

鹿北町では激しい反対運動で2千人を超える反対署名まで出ましたが、国家財政は破綻し、今までの交付金、補助金が続く筈が無い、国債地方債の残高は今年度中に750兆円を超え国民一人当たり600万円、このままでは負の遺産を後世に残すことになる。今までの踏襲では地方分権は乗り切れない。厳しい事情を議会が了承し一致協力。更に町内有識者会議の協力を得て紆余曲折はあったが漸く合併に漕ぎ着けました。

自主財源の少ない町村は合併しても変わらないだろう。でも合併した以上メリットを生み出す努力が肝要で、まず第一に行財政のスリム化であり、予算比率の高い人件費の削減です。特別職と議員の削減はすでに達成した。これから職員の削減と意識改革が必要で、公務員ほど恵まれた職場は無い。民営化で成功するのは合理的経営である。合併で競争意識は出て来る。農協の中間管理職には内部牽制組織があった。他の課に負けない競争心を煽る。公務員は公僕の心を忘れてはならない。

これまでの2年間、真摯に努力された事務局、関係者に対して深い感謝を申し上げ、山鹿市の限らない発展を祈ります。

菊鹿町 川辺 武夫

合併協議会初日は、大変緊張し身が引き締まる思いがした。また、分厚い資料で説明が始まり責任の重大さを痛感した。

小委員会は、「議会議員の任期及び定数の取扱い」に所属。この小委員会は長引くかなと思っていたがスムーズに流れた。というよりは流れすぎたという感じである。互譲の精神のおかげで早く決まったようでありがたいことである。個人としての考えも当初から同じだったので安心した。小委員会は各町を回って行われたので初めて知ることもあり、有意義な研修ができたと思う。

2年間の協議内容は、多くの協定項目があり、ごく身近な内容から難しい内容まで幅広く、特に身近なことについては飛びついていったようである。三位一体の改革や地方自治法第〇条第〇項などの場合は、理解するのに苦労した。

合併後は、自然・歴史・文化を受け継ぎ、新しい大きな山鹿市が輝いていくように願うものである。いや、一人一人がそのようにしていかなければならない。毎日の暮らしの中で、もっと互譲の精神や思いやりを大切にしていきたいものである。

合併を進めるにあたり、市町長や議員の皆さんを始め、合併事務局の皆さん、関係された多くの方々にご苦勞様でしたと何度も言いたい。数多くの部会や資料づくりなど大変だったと思う。職員の皆さんはこれからも大変だけど輝く山鹿市のために頑張ってもらわなければならない。

1月15日。山鹿での開庁式では、緊張の中にジーンとくるものがあった。会議も終わり気合が抜けたという感じである。合併協議会のおかげで多くの方々と出会うことができよかったと思う。今後どこかで出会ったら、お互いにあいさつや声かけを忘れないようにしたいものである。お世話になりました。

## 光り輝く創生

菊鹿町 藤原美津代

合併 昭和30年…菊鹿村 昭和40年…菊鹿町 平成17年…山鹿市誕生！

数十年の長い年月が歴史や文化を作り豊かに暮らせる町を築いて来ています。

しかし、今度の合併は大きく市となり、何か心の中に不安が募ってくるようです。

「まほろば創生」… 素晴らしいキャッチフレーズのもとに協議会が立ち上り、住民説明会、懇談会を重ね、不安の内に世代の移り変りが心の中に刻み込まれます。合併は最大の難題であり、どのようにして心を開き、解き進むことができるのかと…。

歴史、文化、自然、安心安全な暮らし、人と人との和の繋がりを崩さない合併が大事です。それぞれの議題を真剣に討議し、また小委員会を設置し討論を重ねて参りましたが、その結果として大きくひとつの輪にまとまることのできたのは、ひとえに互譲の精神があったからと思います。

また、福祉サービスもより高度になり、一人暮らしの方も年毎に増加していますが、その方々が安心して暮らせるためにも、合併後は広い視野と広い心を持って時代の流れを確認し、過疎化が進まないように協議会の結果を基本に、全市の情報が速やかに伝わるケーブルテレビの配置など推進し、住みよい山鹿市をつくっていただくよう願っています。

また子ども達の人口が毎年減少していることはとても残念に思います。

「将来を担う子ども達のために子どもの教育に金をかけること」

これは、閉町式のときの松野頼三先生のお言葉です。

子ども達が、逞しく夢と希望を持って地域の中で育っていけるように、合併の光が輝きますよう願いたします。

また、市章も数多くの応募作品の中から慎重に選考され、素晴らしいものが決まりました。

2年余りの長期に渡り、多くの項目が協議会において真剣に討議され、全員の努力が実って、1市4町の絆をしっかりと結ばれた山鹿市の誕生です。

委員として、協議会の協定項目の審議を無事に終了することができたことを非常にうれしく思っています。

最後に、合併事務局、行政関係の方々及び協議会委員の皆様のご努力に心から感謝申し上げます。

## 合併に思うこと

菊鹿町 矢野 英明

平成17年1月15日、旧1市4町合併。正直なところ、さみしい気持ちと新市に対する期待とが半分づつ私の心にあります。

私は旧菊鹿町に住んでいますが、人情と自然に囲まれた豊かな我が町、大好きです。ただ、それぞれの地域でそれぞれの方々が同じ気持ちだということも理解できています。この合併は将来現実に起こり得る交付税の削減や地方分権に対応するためスケールメリットを生かし、経費の無駄を省き必要に応じるための政策だと思っています。一言でいえば「国、県、市、すべてが裕福でないので、1市4町集まって皆の知恵と力を出し合い、まちづくりをしましょう」です。私もとても良いことだと思います。新市（山鹿市）の皆さんと共に旧市町の良いところを知り見習い、行政だけに頼らず各々の知識と頭脳と力を飾ることなく気軽な気持ちで和気あいあいと「まほろば創生」の構想が達成するようがんばっていくことが大切だと考えています。新市6万人の皆様どうぞ宜しくお願い致します。

最後に2年間の長きに渡り法定協議会の旧市町の元首長さんをはじめ、元議員の方々、代表委員の皆様、そして事務局の方々、大変お疲れ様でした。この出会いに感謝すると共に大切にしていきます。ありがとうございました。

## “新山鹿市”に栄えあれ

菊鹿町 木村ゆみ子

日本最古の歴史書「古事記」からまほろば創生という意味を表現した1市4町の合併。新市に向けて2年間の協議がなされ、その中の一人として出席した。何の因縁か昭和の合併には中心人物として今は亡き義父がいた。城北村長だった義父は、元教師から村長へ。政治に深い関心を寄せ、新聞をよく読み、NHKニュースを楽しみ、毎朝墨をすり俳句を一句。畑仕事を好み、一杯の焼酎を飲むのが好きな人だった。当時城北は、菊池郡から鹿本郡へ。菊池と山鹿の一文字を取って、菊鹿となったことなど誇らしげに話してくれたことを思い出す。またその当時をよく知る栗原町長も青年時代でくわしい一人である。今こそ楽しく久しい思い出だが、その頃本当に大変だったろうと委員になって思う。

今度の合併は、人口、面積に関係なく対等なものである。私は委員であると共に町の代弁者でもある。小委員会において新市の位置を決定する委員でもあった。お互いの町を思うことから意見の対立もあったが最終的には折衷案という形で落ち着き、あとは各市町長、各議長さん方へと引き継いでいる。

よく協議の中で疑問に思ったことは町議会へ足を運んだ。議会では町の行く末を思う事からよく検討され、熱心な討議が展開されていた。

私は思う。菊鹿町のような小さな町が、いつまでもいつまでも均衡にすみずみまで輝く暮らしができるように。まちづくりの基本方針でもあるテーマ「人づくり」、「暮らしづくり」、「産業づくり」が充分に実現でき、その中で地域資源や伝統を生かしたものであるように…と。

私は、亡き父の墓前に昭和の合併の終わりと新しい歴史の始まりを伝えた。義父とまではい



かないが二代に関わった合併。いつの日か「あの合併はよかった」と次世代の人と誇らしげに語れるものでありたい。あってほしい。と願わずに入られない。

“新山鹿市に栄えあれ”

鹿本町 片山 順士

地方分権一括法の施行、交付税の見直し、合併特例債等国策により、合併問題について調査する特別委員会を設置したのは、平成14年の6月定例議会であった。

合併問題は、避けて通れない課題として、各市町議会と意見交換会を鹿本町において、まず植木町・山鹿市・鹿央町・鹿北町と行い菊鹿町とは、此方から出向き行った。

鹿本町としては、14年4月区長会・議会との共催にて合併についての座談会が、校區別にて開催され、1市5町での合併が最善ではないかとの方針であった。

「鹿本地域合併任意協議会」平成14年8月、山鹿市・鹿北町・菊鹿町・鹿本町・鹿央町1市4町での発足となる。植木町は離脱する。

委員として、各市町の首長・議長・副議長で、合併に向けての協議が平成14年12月まで、5回開催された。特別委員会もその都度開催した。

任意協議会で作成された「まほろば創生」というキャッチフレーズを掲げた、新市建設計画について地区説明会が平成14年12月開催された。議員全員各地区に参加した。

平成14年12月の定例議会において提案された法廷協議会設置案に対し、地区説明会の意向を参考に、賛成多数で議決した。1市3町も議決して、平成15年1月から、鹿本地域合併法定協議会へと移行した。

委員構成は、各市町任意協議会の3名に加え教育長・学識者5名の45名と県職2名の47名である。重要課題は、三小委員会で審議された。議員の定数30名で初回選挙は小選挙区制で。合併当初は山鹿市役所を本庁として、各役場は総合支所とし3年以内に本庁舎の建設に着工し、10年を目処に本庁方式に移行する。名称は、山鹿市とする。等々多くの協定項目が決定された。それを基に、地区説明会が開催され、平成16年6月18日、合併協定書に各首長の署名捺印がなされた。

平成16年6月30日鹿本町臨時議会に提案された、1市4町の廃置分合についてと、関連する4議案を、賛成多数にて可決され、他市町とも可決により、平成17年1月15日より山鹿市となる。

平成14年から、多くの会議がなされてきた。任意協議会5回・法定協議会25回・地区説明会5回・合併問題検討委員会24回・議会の特別委員会35回等々多くの議論協議での合併に向けての年月であった。

合併問題調査特別委員会においては、土曜日・日曜日を問わずまた、夜間にも開催したことも記しておきたい。

子々孫々への繁栄願い協議終え。

鹿本町皆と栄えし五十年

新市山鹿へ夢を引き継ぐ。

## 鹿本町 三嶋 三重

協議会委員に任命されてからの2年間、他の地域と比べると波風の立たない平穏な合併進行と思われがちだったが、その実は、時には感情的になったり、激論し合ったりと、別々の市町が一つの市になるということがこんなにも大変なことなのかとつくづく痛感致しました。それもこれも今振り返ってみると各自が所属する市町、合併後の新しい市に対する想い、理念を持って、より良いまちづくりの為の過程であり、新山鹿市誕生の賜物だったと思っております。そのような中、私は常に鹿本町民の代弁者ということを念頭におき町民の意見を十分に聞き、それを参考に自分の考えを法定協議会で発言してきたつもりです。特に心に残っている事では、重要課題は小委員会が設けられ、全委員がどこかの小委員会に属さなければなりません。私は一番敬遠したかった「議員の任期及び定数に関する委員会」に配属されてしまいました。人間関係の柵、どうしたものかと随分悩みました。「案ずるより生むが易し」議員、住民が一体となつての互譲の精神に則りスムーズに和気あいあいと議事進行していき、団結力、仲間意識が芽生え、議決した時にはこのメンバーとの解散が名残惜しかったことを思い出しております。

25回の協議会を経て健やかに新山鹿市が発足し、私の任務は終わりましたが、スタートした新市政を見守っていく役務が残されている気がしています。その為にもこの2年間苦楽を共にし、特に絆を深めた女性委員9名で「まほろば会」を結成致しました。女性の目線で新市発展の一助となればと思っております。

最後になりましたが、ご意見をお寄せ頂きました町民の方々、事務局はじめ合併に携わられました皆様大変お世話になりました。

新山鹿市に幸多からんことを祈念申し上げます。

## 鹿央町 幸村 勁

平成17年1月15日、多くの人々が様々な思いを託して新山鹿市は誕生しました。顧みますと、平成14年3月鹿央町議会定例会に於いて、「鹿本地域合併検討特別委員会」を設立。議会としてお互いの市町へ往来、検討会を行い、また数回にわたる部落座談会を重ね、最終的に1市4町での合併を決定。法定協での協議を経て、関係市町議会において、平成17年1月15日を合併日とする議決がなされました。幾多の紆余曲折はあったものの、旧1市4町の関係者の熱意と互譲の精神が合併へ導いてくれたものと思います。特に思い出としては、三つの小委員会の一つである「新市の事務所の位置候補地選定小委員会」の長に選任され、微力ながら委員、事務局のご指導ご協力により、審議、調整の任に携わってまいりました。他の小委員会もしかりであります。この事務所の位置につきましては、特に注目度の高いデリケートな案件であり、新市としての政策的判断も考慮する必要があり、9回にわたり慎重に協議しました。「我田引水」を戒めた最大限の努力の成果であり、課題は残っておりますが、これをもって可としていただ

き、将来円満な一致を望むものであります。

いよいよ新市が船出したわけですが、一大事業であった合併も、それ自体は一つの手段であり、合併に費やした以上のエネルギーを新市建設に注がれることとなります。合併の規模のメリットを最大限に活かしていただき、後世から評価される新市建設が推進されることを期待いたします。その為には、住民意識の一体化を図りつつ、行政、住民間の信頼関係を築いていくことが大切であり、特定の地域だけでなく新市全域がバランスよく発展することが重要です。地域審議会を始めとする市民の声を広く聴かれ、独自性豊かな地域協働組織の育成、支援に努められますようお願いいたします。特に、過疎化・少子高齢化が急速に進行している昨今、雇用の確保や次世代支援等、若い世代が定住したくなるような環境整備が急務だと思います。また住民自らも知恵を出し、汗を流し、地域の一員としての役割を担っていかねばなりません。新生山鹿丸の航海が前途洋々たることを願ってやみません。

鹿央町 廣田 昭次

相互の信頼と互譲の精神を貫いた合併協議会は、好ましい新市民意識を高揚し一体感の成立へと進展しました。

平成の大合併が順調に進んだ要因の主な事項を挙げて、お礼の気持ちを申し上げたい。

○地域住民の皆様方の寛大なご理解とご協力が得られたことは、大変心強く感じました。

○市長・町長さん方をはじめ特別職及び議会議員の方々のご勇断が見事であったことに敬意を感じました。

○事前の「任意協議会」における枠組み設定が適切であり、基本方針及び新市建設計画構想が立派に示され具体的な姿を予想することができました。

○市町職員並びに合併協議会事務局出向者の日夜に及ぶ尽力は大変な激務であったと見受けました。

○合併協議会委員が我田引水に奔走することなく、全市民的発想で互譲の精神を貫き、新市建設計画への希望を抱いて参画したこと、等々が思い出に残ります。

平成17年の新春から「まほろば創生」の基本構想に合わせて、徐々にその実現へ向けて歩み始めた今日です。鹿央の総合支所へ出かけてみると、町長の姿も助役の姿も見当たらず、職員使用の机間は広く空いて、一抹の寂しさも感じられますが、職員は各々の職務の守備範囲を広めて、新市発展のために張り切っています。

新市の建設計画の推進と合わせて、平成17年度の山鹿・鹿本地域における熊本県の主要事業の推進にも大きな期待があります。

◎県計画の地域づくりの推進に向けて\*県議会議員 古閑三博氏「県政対話」から引用

①「歴史・文化遺産の活用」＝ときの道づくり＝ ②「菊池川流域の産業基盤の整備」  
＝かわの道づくり＝ ③「中山間地域の地域づくりの推進」＝やまの道づくり＝ これらの事業推進も楽しみであり、展望に満ちた山鹿市づくりへ協力したいものです。

私の提案 ◎人口7万人突破の記念事業を用意して置くのはいかがでしょうか？旧市町で取り組まれた「次世代育成支援行動計画」も合併後の集合体をもって推進されることとなりますが、その数値目標としての7万人突破を望み、目標達成時に表彰や記念事業を計画しておく。結果として出産数の増加、転入者の積極的な転居など望めないものかと考えます。人口は動態であるから、その変動や表彰規定等は関係部課長のもとで検討してもらいたい。

私事、私も地域審議会委員を拝命しました。合併特例法の目玉的な一項目である地域審議会の設置は、旧町議会がなくなった今日では、市長の諮問機関ではありますが議会に近いような審議と答申が求められております。委員会設置の意義に即して微力ながら尽力したいと心新たにしております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

鹿央町 小林 妙子

1月15日、山鹿市役所の開庁式に出席し、2年前の第1回鹿本地域合併協議会に緊張感でピリピリして出席したことが思い出されました。あれから2年。この日が迎えられて本当によかったと思いました。

『互譲』の精神をお互いずっと持ちつづけたからこそ、この新しい「山鹿市」の誕生を見ることができたのだと心底思います。隣接地域として似たようなところを持ち合わせながらも、それぞれの文化・伝統に誇りを持ち、市政町政の独自性がある1市4町。それぞれの主義主張を譲らず、合併合意に至らない地域が熊本県に続出している現在、新しい「山鹿市」誕生を誇らしく思います。

合併協議会も会を重ねること25回。小委員会も本音を出し合い慎重に議論を重ね、良き方向性を見出すことができたと思います。その議論のよりどころとなる膨大な資料の提示。毎回、事務局の方々の並々ならぬ御苦勞に感謝し、そのエネルギーに敬服しつつ協議会に出席いたしました。

合併協議会の一方で、地域住民への説明会も地区ごと、校区ごと或いは各種会合等で開かれ、住民の声をすいあげる良い機会になったことや、月1回「合併協議会だより」の各家庭配布により、協議会の内容や進捗状況を知ることができたことも、この「平成の大合併」が誕生できた要因ではないかと思えます。

1市4町による新自治体の誕生であるがゆえに、今後、幾多の課題があると思われませんが、これまでの経過をふまえ、知恵を出し合い、住民みんなが安心して心豊かに生活できる「山鹿市」の市政運営を希望してやみません。



## 「ふるさと山鹿市」を創る

鹿央町 佐伯 穎二

ふるさとの山や川、野や田畑、家々の佇まい、そしてふるさとの同居人であるお年寄りから子どもまでの実に多くの顔々…、「私のふるさと山鹿市」を語り始めると、何もかもが次々に浮かんで来て、熱っぽくしかも愛おしく、話の終わりを知らない。十数年後の山鹿市の人々にこんな気持ちを味わって頂きたい。

山鹿市がいよいよ発足し、新市創生の真っ只中に市民全体がのめり込みました。同じ船に乗り行財政改革の嵐の中を船出し、荒波を乗り越えて「まほろば」を目指して突き進みます。山鹿市という同舟の絆をしっかりと保持し、山鹿市が日々拡大充実するように、市民が一丸となって人、暮らし、産業の豊かさを創り出してゆかなければなりません。

「まほろば」の理想郷は、人が支え、人が動かし、人が創造します。人づくりこそが目標達成の絶対条件です。教育は、生涯学習の体系の中で市民のライフステージに即した教育の質を重視して構成し、家庭、学校、職場、社会のそれぞれが教育機能を発揮して人づくりを展開します。新生山鹿においては、人（市民）づくりこそが二十一世紀に雄飛する礎となりますし、市行政の施策と同時に新市創造を担う市民の力が大きな鍵となります。

「一人一人を大事に」とか「個性を重視して」と教育にかかわる人だけでなく日本中の人が言っています。しかし、社会や郷土、家庭や職場、学校や役所どれもが欠くことができない私たちの生活がよって立つ基盤であることを忘れず、「世のため人のために」汗を流す市民に皆さんがなっていて欲しいと心から願う次第です。

## 合併協議会を終えて

鹿央町 原田 博美

平成17年1月15日、山鹿市、鹿本町、鹿北町、菊鹿町、鹿央町の合併により新生「山鹿市」が誕生しました。市町村合併という大仕事に携わることができ大変うれしく思っています。

平成15年1月、合併協議会が組織され、委員に首長、議長を始めとした各市町の代表者が選任されました。私は鹿央町から男女共同参画を推進している女性農業者代表として選ばれました。このことは、各地域でがんばっている女性農業者の代表として、意義深く、責任の重さを実感しました。

協議会は月1回の予定で開催され、鹿央町では事前に協議についての勉強会が行われました。この事で協議内容は理解できましたが、審議件数の多さ、膨大な資料に驚く事ばかりでした。回を重ねるにつれて合併するという事の難しさを痛感しました。でもこの会でがんばれたのは農業女性の仲間、委員さん、事務局の皆さんのおかげだと感謝しています。特に会議でとなりの席だった振興局長さんとの会話は行政を身近に感じる事ができてうれしかったです。

新市の事務所位置選定の小委員会は、9回に及ぶ非公開で慎重審議しましたが、おおまかに

場所は決めたものの詳細は新市に委ねるかたちとなりました。内容自体、簡単に結論が出るものでもなく、後半にもなると気が重く出席するのがいやで自称「行きたくない症候群」になりました。

「新市建設計画」の実現に向けて「山鹿市」が動き始めました。不安もありますが新市の発展を願うばかりです。私たち女性農業者も力を合わせて「農業の振興」、「男女共同参画社会づくり」に努めたいと思います。

おわりに一言、小委員会で審議した新庁舎の件、近い将来建設されることを希望します。

鹿本地域振興局長 金子 達郎

私が協議会委員として合併協議に参加をさせていただいたのは、県鹿本地域振興局長を命ぜられた平成16年の4月からのことでした。

初めての協議会で、協議会委員の皆様の合併協議に臨まれる姿勢に強く感銘を受けたことを覚えております。それは、1市4町の信頼関係を大切にする中で協議を進められていたことです。一例を申し上げれば、大変厳しい局面もあった新市名称に関する協議では、どなたも努めて笑顔で発言され、決定した瞬間は委員全員が拍手をされました。議論は議論として尽くし、決まれば快く受け入れる。自明のこのようですが、なかなかできることではありません。今でも拍手の余韻は胸に残っております。

こうしたことを思い起こすにつけ、合併協議会が歩まれた道のりは、他の協議会の模範であったとの思いが強まります。よく他地域の方から、「鹿本は順調に進んでいますね」と声をかけられました。当然他の協議会と同様に多くの課題があったわけですが、それぞれに地元で地道な議論を積み重ねてこられたところに、真骨頂があったと思っています。

協議会委員の皆様には、他市町との協議を担う者として、そのプロセスにおいて恐らく板挟みに似た苦しみを感じられることも時におありではなかったかと拝察いたします。しかし、将来の世代のために1市4町は大団結しなければならないという共通した思いが、互譲の精神となって、この歴史的事業を可能にしたのではないかと考えています。

私は、1市4町の皆様方の良い意味での矜持(きょうじ)ともいうべきものに接しさせていただきながら、市町村合併という歴史的な場面に立ち会えたことを大変有り難く、また、誇りに思っております。個人としても、山鹿市への思いは終生忘れ得ないものとなりました。

最後に、新たな山鹿市が誕生した今、住民や職員の皆様方が良き交わりを得られ、ともに手を携えて次なる前進を続けられることを心から希望しつつ、筆を置かせていただきます。



合併協議会委員

## あ と が き

1市4町は、平成17年1月15日に合併し、大きな行政改革とも言える一步を踏み出しました。

しかし、合併したことで目的が達成されたわけではなく、合併はあくまでもより豊かなまちづくりのための手段であります。合併を成就させるためには、これまでの協議会経緯を十分踏まえながら、現状に即した今後の取り組みが極めて重要な課題となります。

10年後・20年後・・・この記念誌を見開き、「あのときの合併は大成功だった！」と胸を張って言えることを願って止みません。

ページの都合で内容としては不十分ですが、本誌が、合併の概要を後世に引き継がれる貴重な資料となり、御尽力いただいた方々への思い出と癒しの書物となれば幸いです。

今後とも更なる山鹿市の発展のために、御指導、御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成17年5月

山鹿市 企画振興部 企画振興課

## 新「山鹿市」合併のあゆみ

山鹿市・鹿北町・菊鹿町・鹿本町・鹿央町 合併の記録誌

発行 平成17年5月

熊本県山鹿市

熊本県山鹿市山鹿978番地